

## 「ヤコブの逃亡」（創世記二七・三七〜二八・九）

### 1 祝福？

先週私どもは、イサクの祝福が兄エサウではなく、弟ヤコブに行ってしまった、その次第を読んだところで（二七・一〜四〇）。

その結果、イスラエルの歴史は、アブラハムからイサク、そしてヤコブへと、私どもがよく知っている系譜でつながったのです。

祝福が兄エサウではなく弟ヤコブに行ってしまった、そこには色んなことが絡んでいました。それを一つ一つあげることはできませんし、今日はいたしません。ただ言えることは、聖書は、何かが原因で、そうした結果になったというような書き方をしていないことです。

例えば、母リベカのことですが、エサウとヤコブがまだお腹にいたとき、二人が押し合っていた、不安に感じたリベカが、どういうことか主の御心を尋ねたというのがありました。そしてそのとき彼女は、兄が弟に仕えることになるという託宣を聞いたのです（二五・二二）。これは重大なことで、私どもなら、リベカの行動の背後にはあの託宣があったのではないか、などと事ある毎に考えます。しかし聖書は、その託宣と何かを結びつけて書くというようなことをしていません。むしろ起こったことをたんたんと描いています。

いずれにせよ祝福は、人間の罪も色々に絡んで、エサウではなくヤコブに行ってしまったわけです。私どもは、そこに主なる神の深い御心があった、神の救いの計画がそうして進められていった、そのように受けとめ、また信じ、アーメンと唱えるほかありません（ローマ九・一一〜一二）。

ところで先週、兄エサウについて、最後のところ、祝福を奪われたと知ってからのことですが、十分申し上げられなかったことがあります。今日はそこから始めることにします。

エサウは父に、「祝福はたった一つしかないのか」と問いかけ、ないことは彼も分かっていたながら「わたしも祝福してください」と嘆願します。それにイサクはこう答えます。

父イサクは言った。「ああ、地の産み出す豊かなものから遠く離れた所、このお前はそこに住む。天の露からも遠く隔てられて。お前は剣に頼って生きて行く。しかしお前は弟に仕える。いつの日にかお前は反抗を企て、自分の首から鞭を振り落とす」（三八〜四〇節）。

ここの父イサクの言葉、祝福を願うエサウへの答えとして見れば、一つの祝福と見られることもできます（ヴェスターマン）。もしそうなら、祝福の中身は、いまは弟に仕

えるが、いつか必ず解放されるということでしょうか(?)。

しかしその時までには、エサウは、地の豊かさから遠いところで、しかも剣に頼って生きていかざるをえないのです。エサウの子孫エドムの将来がここに告げられていると言われます。

その上でここで私は、あのアブラハムの子、イシュマエルのことを思い出さざるをえないのです。彼も約束の子イサクの前に、居場所を失って、母ハガルと共に追い出されてしまった人です。

しかし神は、この母と子を憐れみ、御使いを遣わし、必ずその子を大きな国民とするという約束を与えてくださったのです(二一・一七)。こうした神からの優しい言葉は、なるほどエサウの場合にはありません。しかしイサクの苦渋に満ちた言葉の中に、子を思う父の気持ちと重ねて、父なる神の憐れみを読むことが許されないのかとも思うのです。エサウを父祖とするエドム人のことは、三六章に、異例に詳しく、系図が記されています。

## 2 逃亡

先週私ども、二七章を一節から取り上げ、四〇節までですが、場面を三つに区切っておきました。今日の箇所は、四一〜四五節まで、四つ目の場面、差し当たり、最終場面です。

イサクは長子エサウに祝福を与えようとして失敗し、弟ヤコブに奪い取られてしまいます(第一、第二場面)。弟にだまし取られたことを知ったエサウ(第三場面)はヤコブを激しく憎悪します(第四場面)。

エサウは、父がヤコブを祝福したことを根に持って、ヤコブを憎むようになった。そして、心の中で言った。「父の喪の日も遠くない。そのときがきたら、必ず弟のヤコブを殺してやる」。ところが、上の息子エサウのこの言葉が母リベカの耳に入った(四一〜四二節)。

この中でまず「父の喪の日も遠くない」というエサウの言葉ですが、これまでの流れからすれば、そもそも家督を譲るといふ話になったのは、イサクが非常に高齢になったことが前提でした。

しかしこの先、創世記を読んでいくと、ようやく三五章の終わりになってイサクの死が語られます。その間ヤコブはエサウ逃れて、結果的に二〇年も故郷を離れることになりました。そして帰って来たときイサクはまだ生きていたことになっています。家督を譲ろうとしたのは、ヤコブもまだ結婚していない、イサクのかなり若いときだったと考えないと、つじつまが合いません。

さてエサウは「根に持って・・・憎む」ようになったとあります。恨みです。殺意にもつながっています。「父の喪の日も遠くない。そのときがきたら」と。エサウも父の生きてるとき弟を殺(あや)めるようなことはできない。それはイサクを非難

することにもなるからです。

しかし、父が亡くなるのを待とうとして、時間的猶予をつくったことが、母リベカの干渉を許すことになります。エサウの動きをリベカの耳に入れる人もいました。彼女はまたもやヤコブを呼び寄せます。

大変です。エサウ兄さんがお前を殺して恨みを晴らそうとしています。わたしの子よ。今、わたしの言うことをよく聞き、急いでハラんに、わたしの兄ラバンの所に逃げて行きなさい。そして、お兄さんの怒りが治まるまで、しばらく伯父さんのところに置いてもらいなさい。そのうちに、お兄さんの憤りも治まり、お前のしたことを忘れてくれるだろうから、そのときには人をやってお前を呼び戻します。一日のうちにお前たち二人を失うことなど、どうしてできましょう（四二〜四五節）。

ハランはアブラハム一族の故郷です。ユーフラテス川上流、メソポタミヤのアラム平原（パダン・アラム）にある町。リベカの故郷でもあり、そこにはまだ彼女の兄ラバンがいました。そこにヤコブを送ろうとしたのです。

「しばらく伯父さんのところに」。 「しばらく」と訳されているのは、かなり短い数日間の意味です。

数日という短期間にエサウの気持ちが変わると、リベカも考えていたとは思いますが、ヤコブを促すために、数日と言った可能性はありません。そしてこの「しばらく」が結果的に二〇年に及んだのです。リベカは、人をやってすぐにも呼び戻すと言っていますが、実際は、リベカがヤコブを見たこれが最後でした。リベカのこととはこの後聖書には出て来ません。創世記の終わりになって、アブラハムもその妻サラも、イサクも、そして妻リベカも、マクペラの洞窟に葬られているというくだりに名前が出てくるだけです（四九・三一）。

### 3 逃げることの意味

リベカの計略はまだつづきます。というのも、祝福を父イサクからもらったばかりのイサクが、なぜ家を離れなければならないのでしょうか。歳をとったイサクにもそれがおかしいことは分かります。

リベカも、兄エサウの殺意から、ヤコブを逃れさせるため、と言うことはできないでしょう。そこで彼女が思いついたのは、ヤコブの嫁探しということでした。というのも、すでに結婚していたエサウの妻たちを、彼女たちがこの土地の人カナン人であるがゆえに、気に入っていなかったからです。ヤコブには、ぜひとも、私たちの同族から妻を迎えてほしい。そうでしょう、お父さんというわけです。それならいまヤコブを、リベカの故郷、イサクにとつても関係の深い、ラバンのところに行かせるのが一番いい。

ご存じのように、イサクも、ラバンの妹リベカを妻として迎えたのです。全く知ら

ないリベカを、父アブラハムの召し使いが連れてきたとき一目惚れした記憶が甦ったかも知れません。

イサクはヤコブを呼び寄せて祝福して、命じた。「お前はカナンの娘の中から妻を迎えてはいけない。ここをたつて、パダン・アラムのベトエルおじいさんの家に行き、そこでラバン伯父さんの娘の中から結婚相手を見つけなさい。どうか、全能の神がお前を祝福して繁栄させ、お前を増やして多くの民の群れとしてくださるように。どうか、アブラハムの祝福がお前とその子孫に及び、神がアブラハムに与えられた土地、お前が寄留しているこの土地を受け継ぐことができるように」(二八・一〜四)。

ヤコブをエサウから逃がすという、本当の隠れた動機は、少しも見えませんが、限リベカの計略はここでも完璧だったといつてよいのです。この後の創世記の展開を見ると、ヤコブは、苦労の末、嫁探しに成功します。しかし同時に、兄エサウを怒らせた、兄は赦してくれるだろうか、なお消えない恐れに苦しむヤコブの姿が描かれています(三二章以後)。

ところでこのヤコブの旅立ち(五節)は、エサウにも、じつは大きな影響を与えることになりました。

最後の段落、六〜九節にあることです。イサクがヤコブを祝福し、パダン・アラムに送り出し、そこから妻を迎えさせようとしたということ、つまり、この土地のカナンの女を妻にしている自分を両親が嫌っていることを改めて知ったエサウは、父と母の歓心を買おうとして、でしょうか、アブラハムの子イシュマエルの娘、マハラトとい名前ですが、それを三人目の妻にしたというのです。

聖書はそれに何か口を挟むようなことは言っていないませんが、前の二人のカナン人の妻がそのまま残っている以上、事情は変わったようで、じつは何も変わらないことは明らかです。

さて、今日の箇所、聖書の記述に従って、ヤコブが逃れていく様子を、ここまで辿ってきました。最後に一つだけ、申し上げるとすれば、今日のところで、ヤコブ自身の姿、声が、ほとんどまったく見えてきていない、聞こえてこないことに、私ども気がつきます。見えているとしたら、イサク、リベカの言うことを聞いている、そこにいるその人という、いわば受動的な存在としてしか、ヤコブはここには出ていないということなのです。

しかしヤコブは家を出たとたん、神と出会い、深い恐れと信仰を経験することになります(二八・一〇以下)。私はアブラハムのことを思い起こします。彼も生まれ故郷、父の家を離れ、私が示す地に行きなさいという主なる神の命令と共に旅立ったのです(一二・一)。ヤコブの旅立ちは、なるほど逃亡でした。しかしそれは、ヤコブにとつて、まだ若いヤコブにとつて、人生の旅立ちでもあったのです。人間、逃げていいのです。逃げる中で、つらい中で、不安の中で、その時こそ神は私どもに出会って下さるからです。

(二〇二二年九月二五日)